

# 国語と沖縄語との関係

(主として動詞・形容詞について)

大 津 不 二 也

## 1) 日琉関係

琉球は、中山国あるいは沖縄国と言われた。天孫氏が支配し、都を中山（首里）に置いていた。後に、源為朝（薩摩半島の豪族阿多氏と婚を結んで南洋諸島と交渉があったらしい。）がやって来、その子尊敦が人望を得た。天孫氏二十五世の代に叛臣に滅されると、尊敦が王となった。（この事を信ずるとすれば、為朝が伊豆に流されたのは1156年であるから、12世紀末から13世紀の初め頃と考えられる。）しかし、四代を経て、天孫氏が再び王位を奪った。これも、三代武寧王の時に国が乱れて危かったが、尚寧王（1609年～）に至ったと言われている。

これに対して、沖縄出身で沖縄の研究家の伊波普猷氏は、次のように説明しておられる。

「おもろさうし」の巻十「ありきゑと（旅歌）の双紙」の二章の「昔初め」の歌に、「最初に日の神あり、日の神遙かに海原を見はるかすに島のやうなるもの有りければ、アマミキヨ（異名シネリキヨ）を召して、島を造れと<sup>つく</sup>のり給ひき、アマミキヨ詔のまにまに降りて、数知れぬ島々を造りしが、日の神もどかしく思ほして、成るを告ぐるや、更に詔りして、其処にはアマミヤ（異名シネリヤ）の民を生まで、異なる民を生め、と<sup>の</sup>宣り給ひき。」と。

又、民間伝承によると、南島人の共通の神祖はアマミキヨ<sup>あまみ</sup>で、奄美大島の東北隅の海見嶽に<sup>あも</sup>天降りして、後に南方へ行った。（氏は、嶽名・神事・その他の関係語から南方へ行ったことを証明しておられる。）。

これらに基付いて、日本民族移住時代（紀元前三千年乃至五千年と推定）に、九州のアマベ<sup>あまべ</sup>（海部、筑前・豊後から隠岐に亘り、あるいは長門・丹後を経て、伊勢・尾張、さては信濃まで及んでいたと言われている。）と言う氏族が、七島から口之永良部に至る七十里の海上を越えて、島伝いに南島へ移住した。そして、かれらは、氏族

制度の組織のもとに生活していた。

天孫氏（アマミキヨの語源が分からなくなった頃、この漢字が当てられた。）が、沖繩島に天降りと同時に王朝を建設して、二十五代も続いたとしているが、歴代の王名も、その間の史実も記されないで、王朝を建てた為朝の子と称する舜天（尊敦とも言う。）のことから書き立てているのは、その社会的分化が外来者の結果で、征服者は尊族となり、被征服者は庶民又は奴隸となったことを物語るものである。為朝の琉球落ちの当否はともかく、「おもしろ」の中に身に甲冑を付けた日本勢の運天港に上陸した事を歌ったもの、14世紀の僧袋中の「琉球神道記」の異国人の琉球支配の伝説、幣原博士の「南島沿革史論」の「平家が滅亡した時、その落武者が竹島・硫黄島・黒島・口之永良部・口之島・中之島・臥蛇島・平島・宝島・大島・石垣島・与那国島等に入ってその痕跡をとどめている。」ことなどから、院政時代（1,100～1,200）以後日本の勢力が南島にはいり、同一の社会現象が殆どあらゆる島々に起こったと見なければならぬ。そして、14世紀の半ば頃には、既に「うらおそひ（浦襲の義）」、「しまじり（島治の義）」、「いままじり（新来者統治の義）」の3個の政治的中心が対立して、殆ど1世紀間も紛争を続けたと。

（伊波普猷氏「琉球語と其の背景」昭14年「国文」  
学 解釈と鑑賞」7月号特輯号 P.122～127参照）

「琉球伝記」によると、隋のヨウ帝が「流虬」と名付けたとか、琉球は元（1281年→）に服したとか、為朝が流れに従って求めて至ったから琉球と言うようになったとか言うが、唐の「柳宗元文集」に「琉球」とあるから、それは誤っていると。

これらの記述から、琉球がシナと関係を結んでいた事が推測される。

いっぽう、14世紀末、琉球は、足利義教が、その弟義照を殺した事の賞として、第9代島津忠国に与えたとなっている。

これをも考え合わせると、13・4世紀から琉球はシナと関係を結び、又、14世紀末頃から日本とも関係を結んでいたことが考えられる。又、1394年の「李朝実録」、1445年の「竜飛御天歌」、16世紀初めの沖繩語の口語の見本である「海東諸国記」付録「語音翻譯」、古くは熊襲がチョウセンと連絡して反服常でなかった事など、考え合わせると、琉球とチョウセンとの関係も、もっと古くからあった事も推測されると思う。

前述のように、14世紀末頃は、島津氏と外交関係ができたが、16世紀初め第11代島

津忠昌は琉球が朝貢を怠ったために怒ったので再び朝貢するようになったと記されている。又、第13代島津忠隆は、1564年琉球を討とうとして薩摩のボウノツ（坊之津）に來た備中ノ国蓮島の王の船を焼き払った。当時、ボウノツはワコウ（倭寇）の根拠地であり、又、日本の三大港のひとつであり、又、15世紀半ば第11代島津忠昌が桂庵禪師を招き、宋学の普及に務め、シナ文化の輸入をはかって以来この港にその門下生が多く集まり、又、シナ人の帰化があった。これらの事から、中継点となっていた琉球は、シナとの関係が、ますます密になったと考えられる。

島津氏は更にその主導権を取るためであろう、第18代島津家久は、琉球尚寧王（琉球王国の最後の王）が朝貢を怠ったとして、1609年琉球を征伐した。その結果、琉球は、徳川秀忠から島津家久に与えられ、琉球は、薩摩藩と又徳川幕府と外交関係を結ぶに至った。など。

その後については、「鹿児島県郷土史」第1巻、第2巻によることにする。

第18代島津家久の時代、1640年には南蛮人が琉球にやって來た、1644年までは、「明」との関係も続いたが、その後、琉球は島津氏・徳川幕府と密接な外交関係を保った。——3代将軍家光の世嗣誕生の慶賀使、1710年徳川家宣継位の賀使、1710年島津吉貴の琉球饑饉の救済、徳川家継継位の賀使、1718年徳川吉宗継位の賀使、1728年中山息王の薩摩への王子派遣、1747年徳川家重継位の賀使、など。（賀使は、薩摩の島津氏と共に都へのぼった。）。

このようにして、薩摩と琉球との関係は密接になり、島津氏は琉球を中にして、シナとの密貿易をなし、巨利を得て繁栄した。

又、言語学的には、次のように考えられる。

伊波普猷氏は、国語（日本語）と沖縄語（琉球語）との共通祖語時代の残存したものととして、次のような用例を挙げておられる。

「ビサラ（＝平良） むな 親みそね おごない……。」（470年位前の宮古島の

「史詩」）

「隣 むな ヤサト（＝八里） むな おごなあり……。」（近代の民謡）

「うごなはれる 神主・祝部等……。」（宣命・祝詞）

「おもる」に20近く出て來る助詞「い」（主格以外にも用いられ、口語でも疑問の終助詞に用いられる。）は、万葉の「志斐伊は奏せ、しひ まほ しひがたりの強語と宣る……。」宣命の「

こ  
此を持つ伊は <sup>ほま</sup> 称れを致し……」の「伊」と同じである。

奈良時代の使役の助動詞「しむ」（下二段→下一段→「ら」行四段：shimera, shimeri, shimeyun, shimeyuru, shimere, shimere; 動詞の未然形に続く。ただし「さ」行四段の動詞には語尾「さ」をとった語幹に続く。）が、まだ使用されている。（平安時代の国語では極めて稀で、「す」、「さす」が有力である。）。

shimeyun が南島のどの孤島でも 使用されている限り、中古以来時を置いて渡来した東北よりの侵入者、もしくは漂流者の群れによって輸入された「しむ」の変化したものとと思われる。

これらは、奈良時代以前の状態を暗示・推測させるもので、量り知れない遠い時代北方の同胞と分かれて南下した時に、持って来られたことは、疑う余地がない。

その他、中古以来の民族移動の結果、古語の世界である九州地方から輸入された古代語、近世になって輸入された国語もあろうが、これらは、日・琉共通語時代の古代語より少ないようだ。（伊波普猷氏の前掲書 P. 123~125参照）

## 2) 琉球と薩摩との関係

「混効験集」（1711年）に収録された語いに、伊波普猷氏「琉球の方言」から補って、沖縄語 470 余語について検討してみると、その約13%程度が特有のものであり、薩摩方言の影響によると考えられる語が約11%程度で、残りの約76%程度は、国語の古い語又は同系のものであることは、その音韻対応の上から明かである。

14世紀末からの島津氏との政治的關係もあろうが、地理的關係もあって、薩摩方言との關係は、大きいと考えられる。

例えば、

首里語	薩摩方言（口語）
へた（海の端、海岸）	unbata, bata (<*hata) はし
まゑなご（女の敬語）	onago
あさって（明後日）	asatte
こねや（この間）	koneda
をってい（一昨日）	otote

国語と沖縄語との関係 (主として動詞・形容詞について)

ゆふべ (夕方)	yobe, yonbe (昨夜)
くぶ (蜘蛛)	kots
こてい (特牛)	kotte, <u>kotte ushi</u>
たもの (たきもの, たきぎ)	tatsmon
みそかけ (衣架, 着物かけ)	ishokake
みおきれとり (お火取り)	okiittoi
くさきな (木の新芽の一種)	kusatsna
ねこがくねぶ (黄橙)	kunets (蜜柑の一種)
たうきみ (唐黍)	tokits (唐黍, とうもろこし)
おとろしや (恐ろしさ)	otoroshika
あがふれ (お食べなさい)	agare
おかばしや (香りが高いこと)	kabashika, kabashi
なから (半分)	nakara
ゆこふ (休む)	yoku
ほんの (真の, 本当の)	<u>honnokots</u>
せど (波の打ち合う所)	seto (狭い谷間)
をなれかなれ (とにかく)	donai konai
よける (ものを過ぎる)	yokuts (避けて通る)
根をこし (草木の根を引き倒すこと)	neokoshi
へんご (塗炭に染められてよごれていること)	heguro (煤煙)
じゅつなへ (さし迫って窮迫すること)	jutsne (ずるくて手の施しようのないこと)
どんまぐい (あわてること)	donmagui
ひにやたばこ (日光浴)	hinatabokko
ちよかけ (ひと切れ)	hitokake
つむきる (摘み切る)	tsnki
<u>つらづき</u> (頬杖)	tsura (顔)
はまる (入り込む)	hamai (おち込む, おちいる)
すもる (くすぶる)	sumoi
みんぢゃい (耳垂れ, 耳下腺炎など)	mindare

ゆいまわる (労働を交換する)	i, imodoshi
なへ (地震)	nae
いいこ, いこ (ふけ)	iko (粉, ふけ)
なへる (手足が動かなくなる)	nayui
へっつい (自在鉤)	hetsi, jiekats
まい (便器)	mai
ふがしゅん (穴を開ける)	hogasu, など

「琉球語便覧 (A Hand-book of the Luchuan Language, 1916年)」には、805 語程度が収録されているが、沖縄語特有の語が約 3 分の 1 程度で、残りの 3 分の 2 は、国語の語いと同系のものである。

この中で約 62 語程度が薩摩方言と同系のもののように考えられる。

「混効験集」(1711年)のものと重複するのを除いて、薩摩方言と同系と考えられるものを挙げてみると、

首里語	薩摩方言 (口語)
nagashi (梅雨)	nagashi
kannayi (雷)	kannare
nuharu (野)	hai
gama (洞)	gama
âfuku (泡)	abuts
nukusa (暖かさ)	nukuka (温かい)
fê (南)	hae
wi (甥)	ue
dushi (友達)	doshi
nusudu	nusuto
shichinju (便所)	shecchin
hagama (釜)	hagama
sôki (竹の器, ざる)	shoke
tagu (手桶)	tago
mishigê (杓子)	meshige

gumiuchi (塵払い)	gonuts
ffuchi (火吹き)	hifuts
yuruyi (焔)	yurui
chûka (土びん)	choka
chihishô (きゅうす)	kibisho
mizôki (竹器の一種)	mijoke, mejoke
banjôgani (曲尺)	banjogane
wata (腹)	wata (動物の臓腑)
ranchu (金魚)	dancho
tâmmya (タニシ)	tabina
gani (カニ)	gane
atabichâ (蛙)	donko bits (ひきがえる)
tômâmi (ソラ豆)	tomame
indômami (エンドウ)	endomame
tachiwachi (ナタ豆)	tatswake
rakujishô (落花生)	dakkisho
gôyâ (苦爪)	nigagoi

など。

### 3) 沖縄語の活用

沖縄語の動詞活用は、ただひとつの形式しかない。例えば、「書く」に当る語の活用は、未然形 *kaka*, 連用形 *kachi*, 終止形 *kachun*, 連体形 *kachuru*, 命令形 *kaki* 又は *kakê* となる。又、「取る」に当る語の活用は、未然形 *tura* 連用形 *tuyi*, 終止形 *tuyun*, 連体形 *tuyuru* 命令形 *turi*, 又は *turê* となる。

以上の例でも知られるように、沖縄語の活用は、語尾変化と共に音韻変化をなす場合が多い。国語の「か」行音は、しだいに口蓋化して「ちゃ」行音に変化しつつある。例えば、*kikyun* (「聞く」) > *chibun*, *chiyun* (「着る」) などのように。

(A Hand-book of the Luchuan language, 1916 P.5参照)

なお、沖縄語の形容詞活用も、「～sa」あるいは「～sha」の語尾を持つ名詞形を語幹として、動詞の活用と同じ活用に統一されつつある。

A. 「動作」・「存在」を表わす語 (\*は假定形を示す。( )は、逐語訳

1) 「する」に当る語の用例

Machigê ya san hazi dêbiru.

(間違いはしない筈で侍る。)

shabitan, shê (<\*shi \*ya), shuru uchi

(し 侍つた→しました) するや する 内

satô shuru bashu

(砂糖を する 頭→製糖する頃)

2) 「言う」に当る語の用例

yyan, yyabî ga, ychan

(言わない) (言い侍る が→言いますが) (言つた)

nû ndî yyuru mura, yu ttukuru

(なん と 言う 村) (言う 所)

註 「yya」「yyu」……は、それぞれ「ya」「yu」の強い音を表わす。

3) 「来る」に当る語の用例

kûn na, chûru gutu sshi……

(来る な。) (来る 如 し ……)

kû

(来い)

4) 「行く」に当る語の用例

ikansê……, ika, ichabira, ichumi

(行かない事は…) (行こう) (行き 侍らむ) (行くか)

ichuni, ichu sê……

(行く か) (行く 事は…)

5) 「見る」に当る語の用例

nda, miran kutu……, nichi, nâbira

(見よう) (見 ない 事…) (見て) (見ましょう)

miyuru yama

(見える 山)

6) 「おる」に当る語の用例

wuram, wuran, wuyi du shabîru  
 (おらない) (おらない) (おり) (ぞ) (し侍る—おります)

wuyabîn, Chu nu wu ga ya.  
 (おり侍る) (人) (の) (おる) (か。)

7) 「ある」に当る語の用例

aran ka yâ arankutu…….  
 (あらぬ か →ないか) ( (あらぬ こと→ない) {事  
から……  
ので……} )

ayabî kutu……. Hanashi nu an.  
 (あり侍る こと→あります {事……  
から……  
ので……}) (話) (の) (ある。)

以上のような用例に基付いて、「動作・存在」を表わす語の活用は、次のようになる。

	未然形	連用形	終止形	連体形	命令形
1)	sa	shi	shun	shuru	sshi (<*sure)
2)	yya	yvi	yyun	yyuru	yyi (<*yyure)
3)	kû	chî	chûn	churu	kû
4)	ika	ichi	ichun	ichuru	ichi (<*ike)
5)	{mira nda	{mî ni	miyun	miyuru	ndi (<*mire)
6)	wura	wuyi	wun	wuru	wuri (<*wure)
7)	ara	ari	an	aru	ari (<*are)

\* は、今日の変化になる以前の原形を仮定したもの。3)の活用以外は、活用語尾は、未然形「~a」、連用形「~i」、終止形「~n」、連体形「~ru」、命令形「~i」で終っている。命令形~êの形は挙げなかったが、口語では用例も余り見ないし、これは命令形「~i」で終る形に助詞「ya」が付いて縮約されて「~ê」となったことが知られる。

以上のように、3)以外は、7)の「an」型活用に統一されている。

B. 「非存在」を表わす語

Nâ nukutôru yuchin nêran hazi dêbiru  
 (もはや 残つておる 雪も ない 箸 で侍る。)  
 ( ないでしょう。 )

Chû-ya makutuni kumun nêran kutu,…….

(今夜はまことに雲もないから……。)

今晚は、ほんとに晴れましたから……。

Shôgaku-tukufun nu rîfichê nên ga ayabira.

(小学読本の字引はないが、あり待ろう。)

小学読本の字引は無いものがございますか。

Kadi nêran natôn.

(かんでなく、なつておる。)

食べてなくなった。

Madô nêran.

(聞かない。)

ひまが無い。

Fintô ya nê yabiran.

(返答はない待らぬ。)

返答がありません。

Yujô nên.

(用事は無い。)

役に立たない。

以上の用例で、未然形「nêra」、終止形「nên」の活用形があって、いずれも「無い」と言う意味を表わしていることが知られる。終止形「nên」は国語の口語「ない(nai) (<文語「なし(nashi)」)」と同系であり、国語でも、沖縄語でも、重母音を避けて長母音化する傾向があるから、「\*nai」→「\*nê」となり、それに沖縄語の終止形の語尾「n (<\*m)」を付けたものと考えられる。しかし、「nêran」の「n」は、未然形をうけるところから、打消の助動詞「ぬ」と同系と考えられる。

例えば、

Ikan sê mashi. [「ika」は、「ichun」(行く)]の未然形]

(行かない事がいい。)

Chân naran. [「nara」は、「nayun(なる)」の未然形]

(どうもならない。)

仕様が無い。

以上の用例の「n」は、打消の助動詞である。

そうすると、「nrêan」の「n」も打消の助動詞と考えられ、「nêran」は二重打消で肯定のように思うが、そうではない。これは、「非存在」を表わす語「nên」を「an」型活用に統一しようとした所から来ているのであって「nêra」を「非存在」

を表わす語の未然形と考え、「nêra」と言う未然形に打消の助動詞「n」を付けて、「nên」（終止形）と同じ意味に用いている。

A・Bの「語の活用」で、仮定形（文語の已然形）を挙げなかったが、口語では仮定や条件を示す場合には、他の表現を取るの、掲げなかった。

C 性質・状態を表わす語

1) 「よい」を意味する語の用例

yutashara hazi dêbiru.  
(よいだろ 管 で侍る。)

yutasha yabîn / yutashiku ga ayabî tara…….  
(よ さ 侍る → ようございます。 (よ く ありましたら ……。))

yutasha bî kutu…….  
(よ さ 侍る事……。 → ようございますゆえ……。)

yutashayi dun sê…….  
(よ く ても せや……。)

yutashan  
(よい)

yutasharu gutô ayabi si ga…….  
(よい こと あり侍る が ……。)

以上の用例から、次のように活用すると考えられる。

yutashara, yutashayi, yutashan, yutasharu, (yutashari) (yutashari)

口語では、仮定形・命令形の用例はあまり見ないし、又、他の語法を用いるので、未然形・連用形・終止形の四活用形を挙げるのが適当であろう。又、連用形には「~shiku」の形も残存している。

その外に、Fi yû atayabîn / yi shina の「yû」/「yi」の語があるが、国語の「  
(日 よくあたり侍る。)(よい品)

いい(ii)」と同系の語の連用形・連体形であると考えられる。

2) 「わるい」を意味する語の用例

wassara hazi  
(悪い でしょう。)

Ziru yatin, wassai bîn.  
(どれ であつても 悪い です。)

以上の用例のように

wassara, wassai, wassan, wassaru, (wassari), (wassari)

3) 「早い」を意味する語の用例

fêsa

(早さ)

fêku mutasa nê nayabiran.

(早く送らにやなりません。)

fêsai bin

(お早よう ございます。)

以上の用例のように,

fêsara, fêsai, fêsan, fêsarū, (fêsari), (fêsari), なお, 外, 「fêku」の残存もある。

4) 「面白い」を意味する語の用例

Wwîrukisha ga ayabîlara…….

(面白う ございましたら……。)

Wwîrukisaru hanashi

(面白い 話し)

umusara hazi dêbiru.

(面白う ございましょう。)

umusara yabita sâ.

(面白う ございましたね。)

umushirukô nêyabirantan.

(umushiruku + ya)

(面白く は ございました。)

umushiri kutu

(面白い こと)

umwssa yabita sâ.

(面白う ございましたね。)

以上の用例から,

wwîrukishara, wwîrukishayi, wwîrukishan, wwîrukisaru, (wwîrukishari),  
(wwîrukishari)

又,

umusara, umusari, umusan, umusaru. (umusari), (umusari)  
(Umussari)

なお, umushiruku (連用形), umushiri (←\*umushirui連体形)の残存があ

る。

以上のように、国語の形容詞に当る語は動詞「an（ある）」型活用に統一される傾向がある。

しかし、前述の語の語幹は名詞であって、この名詞も盛んに用いられる。例えば、

Wannê yâshanu…….                      nîsha nu kamaran.  
 (ひもしきの→ おなががすいて……。)      (まずき の 食べられぬ。)

atsisa yabîn                                      umussa ya bita sâ.  
 (暑さ 待る → 暑うございます)      (面白さ 持った よ→面白うございました。)

ufisha yabî si ga…….                      firumasha yabî sâ yâ.  
 (大きさ 待る (が ……))                      (みごとき 待る よ → みごとでございますよ。)

などのように、名詞が用いられている。

又、国語の形容詞の連用形・終止形と同系と考えられるものも、なお用いられている。

例えば、

ufôku chôyami  
 (多 く 参っておりますか)

ikiraku natôyabi kutu…….  
 (少なく なりました から……。)

sidaku natê wuyabiran ka yâ.  
 (寂しく なつては おりません か。)

Shinuji yasiku natôyabîn.  
 (しのぎ やすく なりました。)

fiku natô yabî siga,…….  
 (寒く なつて 参りましたが……。)

Yuru nu duttu nagaku nata kutu,…….  
 (夜 の よほど 長 く なりましたから……。)

arigatê kutu / umushiri kutu  
 (有難い こと)                      (面白い 事)

mizirashi ki / yî shina  
 (参らしい 木)                      (よい 品)

nadakê hana  
 (名高い 花)

mutsikashi mun  
 (利口な 者)

chirina mizi  
(きれいな 水)

shizikana muyo など。  
(静かな 様子)

又、次の用例は、形容詞の活用が「an」型〔「~ra」「~ri」「~n」「~ru」(「~ri」) (「~ri」)〕活用へ統一された過程を考えるに、有力な資料と考えられる。

…………ufusaga ara shiriyabiran.  
(………… 多さが あるだろうか知り待らぬ→多いかも知れない)

Urin yutashâ ara fazi yayabi si ga,………….  
(それも よき であろう 筈 あり侍る が……。→それもよくありましようが……。)

Kunu shikê ya shikka kuni ga ayabîra, mata firasa ga ayabîra.  
(この 世界は 方形 で侍ろうか、 また 平垣 で侍ろうか。)

16, 17世紀前後の琉球語 (= 沖縄語) の言語状態を反映していると考えられる「おもしろさうし (神歌集)」には、「~sa」あるいは「~sha」で終る名詞形が有力であるが、次の用例は、「an」型活用への統一の過程を考える有力な資料と考えられる。

「おかわりぎや おもろ」――

くちまさしやあもの  
(言葉のすぐれていることあるもの)

ともゝと おがで

かゞ すらに (巻5の42)

ぢやなもひが ぢやなうへばる のぼて

けやげたる つよは、  
(露)

つよからど かぼしや ある (巻14の1)  
(かぐわしき ある)

ぢやなもひや たがなちやる くわか、

こが きよらさ こが みぼしや あよるな、 …… (巻14の1)  
(美しき) (見たき)

以上の用例によっても知られるように、古くは名詞形 (「――sa」あるいは「――sha」) に「an (ある)」が付いた連語があった事が知られる。沖縄語では、連用形や連体形が他の語に接続する時は、活用語尾が省略されるのが普通である。これに基

付いて、口語の活用は、「—sa」あるいは「—sha」の名詞を語幹として、「an」型活用をせしめるようになったと考えられる。

このような「an」型活用に統一される傾向は、いつごろから起こったかを考えるために、性質・状態を表わす語の姿を「おもしろさうし」に求めよう。

16世紀あるいはその以前の首里語（琉球語）を反映している第1巻では、

あけの よろい（巻1の5）  
（赤けの） （織）

「けおのよかるひに」（巻1の19）  
（今日 の よい 日に）

「あはれ、かなしきみはゑ」（巻1の35）

「あまのそこらしや」（巻1の38）  
（天 の うれしき）

「あまのまうれしや」巻（1の38）  
（天 の うれしき）

「ゆきあかりが、おもいぐわ、  
 あがるおりかさが、  
 もちなちやる いけいけしや」（巻1の41）

「あけの（赤色の）」の形は、国語の名詞「あけ（朱緋）」に格助詞「の」が接続した形で、沖縄語でも少ない形であるので、ここでは論ずることを省略する。その他「そこらしや」、「まうれしや」、「いけいけしや」は、名詞形で、又、終止形にも用いられていると考えられる。（これに対して、「そこらし」、「まうれし」、「いけいけし」の終止形に終助詞「や」（感動を表わす）の接続したものと考えられない事もないようだが、前述の「くちまさしやあもの」、「かばしやある」などから、「そこらしや」、「まうれしや」、「いけいけしや」を名詞と考える方が適当であろう。）

「かなしきみはゑ」は、「のろ大神（巫女）」を言うのであるが、今日では美称の接頭辞と考えられる。これは、国語の文語の形容詞「かなし」（口語は「かなしい」、「かわいい」「親愛すべき」の意味）と同系で、「かなし」は、その語幹か、次に接続する関係から「かなしき」（連体形）の活用語尾を省略したものと考えられる。

「よかる」は、国語の文語の形容詞「よし」の連体形「よかる」か、九州地方の「よか（終止形にも・連体形にも用いられる。）」を基にして連体形の活用語尾「る」を

付けたものか、いずれかと関係があると思う。

なお、1554年に出来たと言われる「やらざもりぐすくのひのもん」では、

たしきや くき  
( 固い 釘 )

あさか かね  
( 固い 鉄 )

むかしから いくさ・かちよくの きちやることはなきやものやれども……。  
(外コウ) (海賊) (来たる) (ない)

わう かなし  
王

以上の「たしきや」、「なきや」、「あさか」は、連体形として用いられ、「～kya」、「～ka」の語尾を持っている。これらは、九州地方の「～ka」で終る語が終止形・連体形として用いられる事と関係があると思われる。

なお、1613年に出来たと言われる第二巻では、

はしかりが おもろ、

たまよ、そろいわちへ、

もちつき、あすば(か)ぞ きよらや

はしかりがせるむ(巻2の9)

中ぐすく よしのうら、

よしのうらの めづらしや

けよから しばしば みに(巻2の20)

……………  
けおのゆかるひ(巻2の23)

以上の用例の中の「きよら」は「きよらさ」の語幹で、「きよらや」は、この語幹が終止形として用いられ、それに終助詞「や(感動を表わす)」が付いたものである。「ゆかる」は、前述の「よかる」の「yo」→「yu」の結果、生じたものである。

1620年に出来たと言われる第3巻「ようどれの ひのもん」では、

ちよく きよらく げらゑめしよわちへ……のように、「ちよく」「きよらく」の  
(強く) (美しく) (修理し給ひて……)

ような連用形が見える。

1623年結集の第3巻以下の「おもろ」では、

きこゑさすかさが、

ひやしのつち うたむ  
(樹)

きき かなしけさ (巻4の31)

きこへさすかさが、

つづみの あちなりかなし  
(戯)

ふうくに うちよせられ (巻4の40)

第3とせなるぎやめ、

まだまもり おもかしや (巻4の48)  
(珍らしき)

みちへ おわれば きよらや  
(美しいよ)

つちゑ おわれば みぼしや (巻5の40)  
(見たいよ)

くめの せくせぎみ、

いけいけしく はやせ (巻11の38)

ゑがなんか たてば、

よがなんか たてば、

めづらしやどありよる、

おもかしやどありよる (巻9の33)

くめのせくせぎみ、

いけいけしく はやせ (巻11の38)

いちへき きよら てだよ (巻18の17) , など。  
(美しい) (太陽よ)

〔引用の巻数と歌謡番号は、伊波普猷氏校訂「おもろさうし」による。〕

又、1543年の「やらざもり城」の倭寇碑文には

むかし かぢよく・いくさのきやることは なきや ものやれど……。  
(ない)

又、「おもろさうし」巻14の62では、

きこゑ くになおり、いりて みづこゑは みづ なきやん まみき、いぢやす  
(水 乞えば) (ない) (出す)

まくに、とよむ くになおり。

「なきやん」は、「なきや」を語幹として終止形の活用語尾「ん」を付けたものであろう。

「語音翻譯」（16世紀初め）では、清酒—yoka saki, 多酒—opushi,  
醜—shipakanasa, 面紅—chararo akesa, 大路—opu michi, 小路—ku michi  
暖和一rukusa,（「中山伝信録」では、大一五晦然, 小一枯煞が収録されており  
(u fisha?) (kûsa?)

当時「～sha」か「～sa」で終る形が名詞として、又、終止形として用いられたと考えられる。） 註 諺文で書かれているが、その形を知るために、現在の  
チョウセン語音によって書き改めた。

「華夷譯語（1580年頃か）では、

路近—密集奴 集加撒。

路遠—密集奴 它加撒。

冷—必丑撒 好看—約達撒蜜只。

熱—子撒 (yutashaが連用形に使われているが、これは「好看」の直訳か)

長—那ッ失

短—密失那失, など。

以上の用例から考えると、国語の文語の形容詞の「～し」の形が終止形として用いられ、又語尾に「…さ」を付けた名詞が終止形として用いられた事が考えられる。

1719, 1720年の冊封副使徐葆光著「中山伝信録」は、これより1世紀後の頃の琉球語を写したと考えられるが、その中で

長—拿夾煞, 短—陰夾煞, 浅—阿煞之, 甜的一阿媽煞, 辣的一喀喇煞,  
などのよう「～sa」の形の名詞が、終止形（時に「浅」の場合の「～shi」がある。）  
並びに連体形に用いられている。

以上の諸資料の用例から考えて、沖縄語でも十六・十七世紀頃は、国語の文語の形容詞の連用形・終止形・連体形と同系のものが用いられたが、形容詞の語幹に接尾辞「～sa」あるいは「～sha」を付けた名詞形が終止形・連体形に用いられる事が有力であった。また、国語の形容詞の「く」活・「しく」活の連用形・終止形・連体形も残存し、これに加えるに、九州との地理的關係・島津氏支配による政治關係もあって、「～ka」の語（終止形・連体形）の影響もあって、形容詞の活用形が複雑で、性

質・状態を表わす語の活用を統一する必要を感じたであろう。

それは、「～sa」, 「～sha」を語尾とする名詞に「an（ある）」を接続した連語を振り所にして、「～sa」あるいは「～sha」を語幹として、「an」の活用にならつて活用せしめるに至った。しかし、已然形・假定形・命令形は、他の語法が発達したため、口語では発達していないように考えられる。

この「an」型活用を用いるようになった時期は明確に得ないが、「中山伝信録」などの資料から考えて、19世紀の前半頃ではないかと思われる。

なお、性質・状態を表わす語の活用は、沖縄語圏内の各地に多少の相違がある。一例を示せば、次のようである。

否定形	連用形	終止形	連体形	假定形
sidaku,	sidasha,	sidashari, (涼しい)	sidashan,	sidashari (奄美大島) (半島名瀬)
否定形 sidâsifu (wa),	sidâsi,	{sidâsituari sidâsinu sidâsimuïnu	sidâsi,	siadâsikari (宮古)
—	sidassâri,			
未然形 否定形 sidashara,	sidashari,	aidashan,	sidasharu,	sidashar,

「～sa」は、連用形の語尾「く」を取る語の場合で、「～sha」は、連用形の語尾「しく」を取る語の場合であるが、「～sha」は段々すたれて来る傾向がある。

この研究に手を付けて4カ月になる。それも仕事の合間に限られ、それに資料も余り利用し得ない状況にある。日・琉関係については、沖縄出身の沖縄研究家の伊波普猷氏の「古琉球」など同氏の著書に負う所が多である。琉球と薩摩藩との関係については、「鹿児島県郷土史」に負う。

沖縄語については、伊波普猷氏「南島方言史攷」、東条操氏「南島方言資料」、宮

---

良当壮氏「八重山語彙」，伊波普猷氏監修「琉球語便覧 (A Hand-book of the Luchuan Language for the Use of Tourists and Residents, 1916)」，伊波普猷氏校訂「おもろさうし」，宮良当壮氏「八重山古謡」，沖繩出身の同学の友諸君の援助，旧高校の恩師新屋敷幸繁先生の提供の資料その他に負う所が多大である。

浅学にして妄言や誤謬も多い事と思う。先学の諸氏のご教示を乞う次第である。